

現徳山市域内の幕末維新期に活躍した群像たち（その二）

—— 長州藩による御親兵貢献建議と京都御所堺町御門の警衛について ——

会員 小林省三

はじめに

現徳山市域内の幕末維新期に活躍した群像たちについて、ペリー来航から御殿山英国公使館焼討までの期間に勃発した事件を対象として、その概要を『徳山地方郷土史研究』第二三号で報告した。

その後も幕末維新期の各段階の事件において活躍した「現徳山市域内の群像たち」について調査を進めた。

ここでは、文久三年中の長州藩による親兵貢献の建議と京都御所堺町御門の警衛に活躍した「現徳山市域内の群像たち」を紹介する。

本稿では調査が未だ十分とはいえないが、従来より

必ずしも明確な指摘がされていないこれら群像たちの活躍とその関連事項について、現在明らかになった部分を紹介することにした。

一、長州藩による親兵貢献の建議

文久三年（一八六三）二月二八日長州藩は、次のような親兵貢献の事を上書した。

御親兵之儀先般御沙汰被為在候處今以御人數不相
 揃當今外患切迫に付差越候儀には御座候へども大
 膳大夫石高に應じ萬石一人の當りを以選士三十七
 人貢献仕度奉存候右貢士御規則之儀は於朝廷御吟

味可被為在候へども於干下も存付之廉有之候はば
追て申上にて可有御座候其内貢獻御許容被仰出候
はば右貢士へ御手當食料用金等は膳大夫より朝
廷へ献上仕從朝廷御手當被下置候様可被為在事

(註①)

この献兵の建議は、三月六日には朝廷に嘉納され、
三月一八日には幕許があり、諸藩に親兵を貢進するよ
う幕令が出された。その後、三月二一日には坊城家よ
り

為禁闕御守衛諸藩拾萬石以上高割を以て壹萬石に
付壹人宛貢獻致候儀於大樹御請に相成候間各忠勇
強悍之士を精選有之兵器食料之に準し被差出候様
被仰出候猶御規則制度之儀は追々可被仰出候得共
右選士急に取極可申出候事(註②)
と朝旨が下された。

その朝旨は、信田作太夫が河原町御屋敷で長門様に
拝謁した折に御留守居役村田次郎三郎より別紙の御内
勅の写しとしてその拝見を仰せ付けられた。

そして、

右親兵の義は攘夷御一決御親征にも相成候御手當
の為に候へば徳山様よりも三四人選士御差出可
然左候時は右三十七人の内へ御加入相成り此御方
にて唯今御手當相成候御人數の内徳山様より出候
御人數丈被為減候筈に御坐候間早々御差登候相成
候様御国元へ御申遣可被成様(註③)

と徳山藩に申し達せられた。これにより徳山藩では、
浅見安之丞・信田作太夫・朝倉練治・松野顯・小田岩
雄の五人を選士とした。

二、長州藩による京都御所堺町御門の警衛

文久三年(一八六三)五月二〇日の朝廷の評定は長
引き、朝臣の退朝は夜に及んだ。国事参政、右近衛権
少将姉小路公知は退朝時亥の刻(午後一〇時頃)朔平
門の前で三人の刺客に襲われ、翌二一日丑の刻前(午
前二時少し前)絶命した。この事件により朝廷では犯
人の搜索と御所の警衛が問題とされた。そこで朝廷は

次のような命を諸藩に下した。

清和院門 土州 堺町門 長州

蛤門 水戸 寺町門 肥後

乾門 薩州 下立売門 仙臺

今出川門 備前 中立売門 因州

石薬師門 阿州

昨夜於朔平門邊、姉小路少将様へ刃傷之儀有之、
不容易候間、右九門口、今晚より御固之儀被仰付
候間、酉刻より潜門共しめ切候間、通行之節姓名
行先相斷可申事。

此段為御心得可申入旨に候。御家来末々迄御示置
可被成候。此段可申入兩傳被申付候。

五月廿一日

兩傳奏雜掌（註④）

長州藩では直ちに堺町御門警衛の任についた。その
ときの兵には、既に用意していた御親兵を用い、不足
の要員は岩国の兵で補い、総勢七五人を五番に分ち、
五人を一伍、三伍を一隊に編成してこれを一番とし、

輪番に宿営させた。（註⑤）

三、御親兵として堺町御門警衛等で

活躍した現徳山市域内の群像

選士の一人である浅見安之丞は、天保四年（一八三三）一〇月一五日徳山藩士浅見栄三郎と母常の長男として周防国徳山で生まれた。「諱」は正虔、「字」は子恭・伯恭、「称」は虔之輔・安之丞と称し、「雅」を烟溪・煙溪と号した。

安政元年（一八五四）に徳山藩校鳴鳳館の句詠方となり、翌年から大島流槍術指南役の教授を兼ねた。万延元年（一八六〇）には小姓役となり、文久元年（一八六一）藩主元蕃に従って江戸に赴き、翌年七月には藩主元蕃に従って京都に入り、徳山藩士の一員として京都警備に任じられた。その後帰国し、文久三年（一八六三）三月には小姓役を免ぜられ、親兵として撰ばれて上京し、同年五月二日に京都御所堺町御門の警衛に任じた。同年四月一日孝明天皇は、毛利元徳（定

廣)の建議により石清水八幡宮に行幸された。この行幸では、鳳輦の警衛を毛利元徳(定廣)に一任された。

また、今回は世間種々の風説が在ったので、諸侯に警固増員の令が下った。その折、

(前文略) 右来る十一日行幸の節從朝廷御沙汰に由て三條西少將殿へ為加員隨身被差出候事。(中略)
浅見安之丞(徳山) 右同日還幸之節同斷交代として被差出候事(註⑥)

と浅見安之丞は、孝明天皇還幸時に三條西少將隨身として扈從した。

同年七月三〇日には、孝明天皇の閱兵時に御守衛に任じられた。それは次の史料でわかる。

朝倉練治松野穎浅見安之丞小田齋種右明二十八日於建春門外馬場觀覽被遊候間御守衛として被差出候條朝六半時堺町御門へ相揃被仰付候事(註⑦)

実際には、二八日は雨天となり閱兵は三〇日に延引された。

また彼は、同年七月二九日に周旋方となった。その

ことは次の史料で分かる。

浅見安之丞俗牘

一筆啓上仕候秋冷之砌御坐候得共先以上々様益御機嫌克被遊御坐恐悦至極奉存候隨而貴君彌御壯健被成御坐珍重不少奉存候然ば私儀過る二十九日御奉書を以て勤懸より當分御周旋方取計被仰付候萬端宜御授與奉願候右御吹聴徳御頼旁如斯御坐候恐惶謹言

八月四日 浅見安之丞正虔 (註⑧)

同年八月一八日の変により、長州藩は京都御所堺町御門の警衛を解かれ、一九日払暁には長州藩士は退京した。その折、浅見安之丞は、「後事を整理し大坂に出で清末・岩国両家の状況を視察して」出発し八月二六日徳山に帰着。帰国の旨を告げて「此夕早駕にて山口行九つ時山口着御面會相成候事(註⑨)」と宗藩の館に到り当時山口滞在中の徳山藩主に京都の状況を報告した。また、七卿が三田尻に下向せられたときは、藩主の命で三田尻に出張した。その後、徳山藩世子の附役

学業向引受けを命じられ世子に従い山口に赴いた。

元治元年（一八六四）七月には、世子付きを免ぜられて学館訓導役を命じられた。

同年七月一九日の禁門の変により、徳山藩内でも藩論が恭順・主戦の両派に分かれて紛糾し、恭順派がついに主戦派を弾圧して哀を幕府に請うという事態になった。

同年八月一二日に恭順派によって浅見安之丞に対してなされた弾圧行動の一端を次の史料で知ることができさる。

一（前文略）御書付之趣栄三郎倅浅見安之丞右御思召有之御雇にて学館訓導役其外御用掛り等被差免親子兄弟之外他人相對被差留候間相愼無可申候右之通被仰出候事（後文略）

一（前文略）應接ハ父様ト叔父修次殿被罷出候處梅央口演安之丞殿君命ニ付就縛御組頭森殿之可被罷越トノ由ニ付戰死候ヘハ父叔父も同時同死ノ様子見ヘ母も自滅之模様且ツ君命ト申事ニ付

乃君命ニも不背父母之命も助ケント罷出應接候處劍ヲ脱シ就縛ト云然處拙者ハ弟次郎彦逢暴殺之趣承知ニ付彼之所置君命不似合定而拙者義も次郎彦同様可致ニ付容易ニ承引難相成何分御組頭迄此儘帯刀にて差越主水殿對論之上如何様ニも相成可申ト議論候ヘハ縛ハ父ニ任索ヲ我帯ニ挾刀モ不脱右人數前後左右ニ警固森氏之到ル

（後文略）（註⑩）

同年七月一二日に浜崎の獄に繋がれ、九月五日は御客屋で詰問を受けた。その詰問時の直接の詰問者は調役の野村忠左衛門であったが、御徒目付山田幸兵衛・調役兼崎寛九郎・筆者花田精司、屏風の陰に上役飯田厚藏・坂田紀之丞が立ち会っていた。

慶応元年（一八六五）正月七日宗藩では大田村（現美東町）繪堂で内訌戦が開始された。優勢に戦闘を進めた高杉・山県等の主戦派が山口に入り、或いは徳山にも乱入するのではと、徳山藩の恭順派政権は恐れおののいた。この様な状況下で同年正月七日・八日頃、

御役頭中川修人が検断組国光利兵衛・光村文左衛門・林与組寛四郎左衛門の三名に命じて行なわせた毒殺謀略では幸いにも安之丞は死を免れた。しかし、三日後の一四日夜彼は、新宮の浜辺で絞殺された。享年三三歳。その状況は、次の史料で知ることができる。

(前文略) 私共三人新宮江罷越、川土手ニ相控居申候、其節番人之者安之丞義冲辺江連行、始末相果し候由ニて追付罷帰り候間如何取計候哉と相尋候へハ、綱を首に掛け左右より引締め、左候て川中江暫く沈置候処、程なく息も絶候様相見候ニ付引上げ老人番に附置き、残り七人之者(後文略)

(註⑪)

同年二月五日、獄吏から内密の連絡があり、遠石の浜の砂中に埋没されていた死体を掘り与えられた。家人これを受領し、即時徳山興元寺に葬り現在に至る。

明治二二年朝命により靖国神社に合祀。明治三一年贈従四位。

信田作太夫は、文政一二年(一八二九)五月一六日徳山藩士信田十左衛門盛諄の長男として周防国徳山で生まれた。「諱」は徹胤、「字」は伯懿、「称」は作太夫と称し、「雅」を秋琴と号した。

安政元年(一八五四)三月、筑後柳川藩士加藤善右衛門の塾に入って大島流槍術を学び、日ならずしてその塾頭となった。安政五年(一八五八)一〇月には徳山藩の小姓役となり、安政六年(一八五九)三月、福山藩の槍術指南役に聘せられ、万延元年(一八六〇)八月帰国して徳山藩の槍術指南役を勤めた。

文久二年(一八六二)五月四日、同年七月に朝廷警衛のため上京する淡路守(徳山藩主毛利元蕃)護衛の準備のため、二〇数名の徳山藩士と共に信田作太夫は上京した。そして「彼等は京都に於て周布。桂。日下等の大々の計畫を賛成し年末より翌年に掛けて國內の改革に着手實行し」たのである。(註⑫)

攘夷の催促と名分の改正、勅使取扱方の改正、御親兵設置を幕府に求めるため、朝廷の勅使として正使中納

言三條実美と副使少将姉小路公知が、文久二年一〇月一二日京都を出発して江戸に向かった。その折、宗藩の世子元徳（定廣）も加わったが、作太夫は遠藤貞一郎と共に副使少将姉小路公知の部下に加わり江戸に入った。そして同年一二月二三日、目的を達成した勅使は京都に帰った。作太夫は文久三年（一八六三）春に京都に帰り、周旋方となり京都に留まっていたが、同年三月親兵に撰ばれ同年五月二一日に京都御所の堺町御門の警衛に任ぜられた。当時の彼の様子を次の史料で知ることができる。

文久三年在京師信田作太夫俗牘

上々様益御機嫌克被遊御坐恐悅至極奉存候随而彌御壮健可相成御精勤目出度御義奉存候次私儀無別條相勤（親兵として）罷在候間乍憚様御休慮思召可被下候姉小路様御不慮の義御所警衛彼是多忙色々々々可申上候其内時下随分為国家御自愛專一の御義奉存候右御見舞為可申上早々如此御坐候恐惶謹言

五月二十五日

信田作太夫

（郡代）

（大目付）

（御密用）

飯田 厚蔵様 児玉次郎彦様 井上阿兵衛様

本城 清様 河田 佳蔵様 遠藤・貞一様

江村彦之進様（註⑬）

文久三年四月一日の孝明天皇の石清水八幡宮行幸時、作太夫は長門様（毛利元徳）に随従し、一二日夜宗藩邸で御酒を頂戴した。

同年八月一八日の変により、長州藩は京都御所堺町御門の警衛を解かれた。作太夫は退京後八月二六日に三田尻に着船、当時徳山藩主が山口に滞在中であったので翌二七日に山口に到り、二八日に帰徳した。

元治元年（一八六四）七月一九日の禁門の変により主戦派の一人であった信田作太夫は、恭順派により浜崎の獄に繋がれた。そして、同年九月二四日には御客屋で詰問を受けた。詰問者は、出役木村保太夫であったが、出役野村忠右衛門・御徒目付山田幸兵衛・筆者花田精治・検断頭松本郡兵衛、屏風の陰に上役飯田厚

蔵・岩内勇記が立ち会っていた。

慶応元年（一八六五）正月七日・八日頃御役頭中川修人が命じて行なわせた毒殺謀略では、信田作太夫も死を免れた。然し、三日後の一四日夜、彼は新宮大たぶで絞殺された。享年三七歳。その状況は、次の史料で知ることができる。

（前文略）夫より文左衛門鍵持参牢屋江罷越申候、其節四郎左衛門私両人之者ハ牢屋後ニ相控居申候処、安之丞作太夫清三人之者壹人ツツ文左衛門義引出し申候、其節私共ハ新宮海辺之上の方を見廻り居申候、夫より番人之者より夫々始末し相果し、作太夫死骸ハ大たぶ之浜辺江仮埋め（後文略）（前文略）其節之咄に作太夫義少々手強く相働候へ共、多人数にて取押へ候故無難相果申候由、（後文略）（註⑭）

同日五ツ時頃番所より、死骸が家人に下げ渡された。家人はこれを受領し、即時徳山八正寺に葬った。

明治二十一年朝命により靖国神社に合祀。明治三十一年

贈従四位

松野頼は、天保十三年（一八四二）一月四日徳山藩士松野誠の二男として周防国徳山で生まれた。（諱）は信幸（行）、〔称〕を頼と称した。

文久三年（一八六三）三月親兵に撰ばれ、同年五月二一日に京都御所堺町御門の警衛に任じられた。

同年四月一日の孝明天皇石清水八幡宮行幸（往）時、

（前文略）松野頼（徳山）右来る十一日行幸の節従朝廷御沙汰に由て三條西少将殿へ為加員隨身被差出候事（註⑮）

と松野頼は、三條西少将隨身として扈從した。また、彼は同年七月三〇日には、孝明天皇の閱兵時に御守衛に任じられた。

元治元年（一八六四）七月一九日の禁門の変には、久坂勢の一員として参戦し、変後大坂川口で飯野藩兵に捕縛され大坂千日獄で刑死（斬殺とも）した。享年二三歳。京都府靈山護国神社と新南陽市永源山招魂場

に葬られている。

誓詞

朝倉練治は、徳山藩士で二五石、中土下等。(註⑩)
生没年、未調査。

文久三年(一八六三)三月三日、親兵に撰ばれ同年五月二一日に京都御所堺町御門の警衛に任ぜられた。

同年四月一日の孝明天皇の石清水八幡宮行幸時、信

田作太夫と共に長門様(毛利元徳)に随従し、一二日の夜宗藩邸で御酒を頂戴した。また、同年七月三〇日孝明天皇が建春門外馬場で閱兵されたとき、御守衛の一員となった。

同年八月一八日の変により、長州藩は京都御所堺町御門の警衛をとかれた。他の御親兵と共に退京し、八月二六日三田尻に着船、翌二七日徳山藩主滞在中の山口に到り、二八日帰徳した。

慶応元年(一八六五)五月一〇日、徳山藩主毛利元蕃が山口出張時に前衛の一員として随行した。

彼は、同年九月一七日に『徳山藩有志血盟書』に血誓している。そのことは、次の史料で分かる。

此度御書下之旨厚く奉躰屹度相守度、若相背き候節は御互ニ切瑳を加へ、条約通武士道相立候様可

仕候、依而血誓如件

慶応元年乙丑九月

条約

一 儉安之説を唱へ、人之英氣を挫き、急務ニ懈候

者ハ自ら罪を乞はん

一 越訴いたし候者同断

一 私党を結び、俗論を主張する者ハ死せん

以上

慶応二年二月十一日 朝倉 練治 血判花押

外 各藩士 略 (註⑪)

小田齋種(岩雄)は徳山藩士であるが、生没年等、

未調査

文久二年(一八六二)五月四日、同年七月に朝廷警衛のため上京する淡路守様護衛の準備のため、小田齋

種は上京した。その詳細は、次の史料で分かる。

文久二年五月上京有志

(前文略) 淡路守護衛として萩の有志と同一行動を取り見掛り迄御迎の議起り代官御密用係井上菊坡要路に當り之を賛成し五月三日夜御沙汰あり翌暁出發の人々は林與。望月關馬(桂左衛門の子)

児玉次郎左衛門(青田・品山) 河田佳藏。龜谷梯次。増野友左衛門。中村治。生田森衛なり申込者中には堀田惣兵衛。中村格雄。磯辺半藏。米田善兵衛。浅見修次。井上達次郎。信田作太夫。小田齋種。山県彌兵衛。坂範次郎。長井小次郎あり徒士の中には久留原仁兵衛。野村忠右衛門。其子庄二郎。河村文太(幸佐)兼崎昌司。杉浦美和藏。勝屋喜七郎あり福岡五郎兵衛(春水堂) 江村彦之進(風月) ありき(後文略)(註¹⁸)

文久三年(一八六三)三月三日、前記四選士と共に親兵に撰ばれ、同年五月二日に京都御所堺町御門の警衛に任ぜられた。また、同年七月三〇日、孝明天皇

が建春門外の馬場で閱兵されたとき、御守衛を命じられた。同年八月一八日の変により京都御所堺町御門の警衛を解かれ、他の御親兵と共に二八日には徳山に帰った。

おわりに

本稿は、徳山地方郷土史研究会「平成一三年度第一回例会」で研究発「回例会」および「平成一三年度第一回例会」で研究発表したものの内その一部を選択し、加筆成稿したものである。

調査検討が不十分な面もあるが、与えられた紙幅の関係で各群像たちの経歴・業績などについては関係した事件に関するものを重点的に詳述し、その他の記述はできるだけ割愛した。

今後とも調査検討を進め、幕末維新期の各段階で活躍した「現徳山市域の群像たち」について、新しい視点から調査検討をしていきたい。

註① 末松謙澄著『防長回天史第三編下』

(柏書房、一九六七年) 三九五頁

② 右①に同じ 三九九頁

③ 兼崎茂樹編集『橙堂遺稿補遺』三三五頁

④ 徳富猪一郎著

『近世日本国民史攘夷実行編』

(明治書院、一九三六年) 三七八〜三七九頁

⑤ 山口県編纂『防長歴史暦上』 三六八頁

⑥ 兼崎茂樹編集『橙堂遺稿補遺』 三三八頁

⑦ 右⑥に同じ 三四〇頁

⑧ 右⑥に同じ 三四二頁

⑨ 右⑥に同じ 五〇三頁

⑩ 徳山市編『徳山市史資料』四五四〜四五五頁

⑪ 徳山市史編集委員会編

『徳山市史史料中』 一五〇頁

⑫ 兼崎茂樹編集『橙堂遺稿補遺』 五〇二頁

⑬ 右⑫に同じ 三三五頁

⑭ 徳山市史編集委員会編

『徳山市史史料中』 一四八頁 一五〇頁

⑮ 兼崎茂樹編集『橙堂遺稿補遺』 三三八頁

⑯ 徳山市史編集委員会編

『徳山市史史料中』 五九頁

⑰ 右⑯に同じ 一六一頁

⑱ 兼崎茂樹編集『橙堂遺稿補遺』 五〇二頁

付記 本稿作成にあたり、多くの啓蒙書籍の恩恵

を受けているが、それらについては注記して

いない。